
恋に狂いしお菓子の国のアリス-前編-

桜木咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋に狂いしお菓子国のアリス - 前編 -

【Nコード】

N4935Y

【作者名】

桜木咲

【あらすじ】

かがみの
ありす 鏡乃 亜莉栖は普通の女子中学生、彼女も恋をする一人の乙女であり恋に狂う一人の女性である。

そんな亜莉栖、今日は大好きな彼が家に遊びに来る日いつも外で会っている彼女だったが今日は特別な日だから初めての手料理を振舞うことに決めていた。

彼女の作る料理は果たして……ビターな大人の味？甘みがある甘い恋の味？酸味の利いたいたずら心の味？

ダイニングキッチンそれはとても嬉しい場所、え？ なぜかつて？ それは好きな人それは大切に思う家族に自分の気持ちを伝えるところだから、そして今日は私の大好きな人が始めて家に遊びに来る日。

「……」

私は手に買い物かごをぶら下げて鼻歌まじりでスーパーの中を歩き回っていた、目的のものはチョコレートに牛乳、生クリームにビスケットである。

すごく軽快な足取りで歩く私って何かすごく奥様って感じしない？ ……まだしないか、だってまだ中学生だし。

「よしっと」

お目当てのものをかごに入れてとレジを通り購入。

ふと時計を見ると正午0時15分過ぎ、彼が来るのは午後3時30分まだ時間はたっぷりある、私はまっすぐ家に向かって歩き出す。
「あ！ 亜莉栖じゃん！ どうしたの？ 鼻歌なんて歌っちゃって何かいいことあるのかな？」

「ん？ 別に何もありませんわよ」

私は帰り際に出会った友達に探りをいれられるけれど惚けてみる。
「またあゝ、どうせ彼のことでしょ？」

「あ、わかる？」

「当然よ、私達何年の付き合いなのよ」

この子とは小学校の時から付き合いだからわかって当然かな？
「それもそうよね」

「で？ 彼でしょ？ 彼が関係あるんでしょ？」

「んゝ、まあ……ね？」

「やっぱり、ごちそうさま」

「あはは、じゃあ私家に戻るからまたね」

「うん、彼によろしくね」

私と友達は互いに手を振り合つて別れる、その後はいろんなお店のおじさんやおばさんにも声をかけられ道端で大道芸のピエロさんに風船を貰つて帰宅した。

「ただいまあ」

私は玄関を開けて片方ずつ靴を脱いでキッチンへと向かう、そこで買ってきた物をテーブルに置いてさっそくエプロンを着る。

「さつて、今日のメニューは初挑戦のチョコレートタルト」 材料は……うん！ オツケーね」

私は袋を開けて材料を取り出す。

「え〜つとお？ まずはビスケットの入った袋に穴を開けてつと」
私はビスケットの袋を取り出し切込みを少し入れ、麺棒で粉々にビスケットを磨り潰すその間バターをレンジで20秒〜30秒ほど加熱して溶かしている。

「〜〜」

ちょうどいい具合にビスケットも磨り潰しバターもいい具合に溶けるとこの二つを合わせてよく混ぜる。

私は今大好きな人に大好きな手料理を食べてもらえることに幸せを感じていた。

「よし」

「亜莉栖〜？ 火の扱いには十分気をつけるのよお？」

キッチンの扉が開きママが入ってきて注意を促す。

「わかつてるわママ、今日もこれからお仕事？」

「ええ、今日はちょっと遅くなるかも……夕食は外でとってくるからパパと二人で食べてね」

「はい」

「それじゃあ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」 ママ」

扉が閉まるとすぐに外にある車のエンジン音が聞こえた。

「ママもたまには家でゆつくりすればいいのに」

私はそんなことを言いつつも頭の中はもう彼のことについていた。ちらちらと時計を気にしながらも手を進めていく。

すでにタルトの土台は出来上がり、チョコレートを溶かして卵を中に入れて熱で170 に温めておいたオーブンで20分前後焼く。

その間は少しだけ気になっていた本の続きを読むもののやっぱり彼のことであまり頭に入らずにそわそわする。

「お？ 今日またいい匂いがするね何を作ってるんだい？」

今度はパパがキッチンに入ってくるとオーブンの前で匂いを嗅ぐ。

「ちよつとパパってば……今日はチョコレートタルトよ」

「ほう、つと言うことは今日は前に言っていた彼が来るのかな？」

「ええ、だから腕によりをかけて作ってるのよ」

「そーかそーか、余ったらパパにも分けてくれ」

「ええ、余ったら……の話だけどね」

私とパパは15分ばかり話し、パパはそのまま自分の書斎へと戻って行った。

「そろそろかしら？」

私はオーブンを開けて中を確認する。

「うん、いい感じね、あとは粗熱を取って冷蔵庫ね」

時間を見るとすでに買い物に行ってから早1時間ちよつと経過していた。

「よし、この間掃除……ん？」

ふとバッグを見ると携帯がなっている、どうやらメールのようだ。

「えーつとなになに？」

——楽しみすぎて早く着いてしまいそうだよ、亜莉栖は今何をしてる？——

「ふふ、なーいしょ」

私はそうメールで返信を返すとすぐにメールが返ってくる、彼は

とても空気が読めるのである程度やりとりしたら最後のメールには
こう書いてあった。

——もつといろいろ話したいけど亜莉栖に会うまでちょっと我慢す
るよ——

「ふふ、気にすることないのに」

私はクスツと小さく笑うとキッチンを片付け、掃除をし洗濯物を
取り込み私自身の着替えも行う。

「さて、準備万端ね」 ちよつと外に迎えに行こうかしら」

こうして私は軽快な足取りで彼を迎えに行く、歩くこと10分ほ
どで駅に着く駅前の噴水近くで彼が待っているのを見つけると私は
少し驚かせようと背後から忍び寄る。

「すう……わっ！」

「うわわ！」

彼は驚いて椅子から落ちた、ちよつとやりすぎたかなとは思っけ
ど彼はそんなことでは怒らないとわかっていた。

「ちょ……ビックリした」

「あはは、ごめんなさい」

私は舌を出して謝る、彼はズボンを軽く叩きながら笑顔を私に向
けてくるそんな彼が大好きだった。

「じゃあ、行こうか」

彼は私の手をそつと握る、私も握り返して家に向かうのであった。

（後書き）

こんにちは、はじめまして桜木 咲と申します。

この度は私が書いた短編小説をお読み下さりありがとうございます、こちらの小説は前編と後編の2つに別れています。

主人公がちよっと大人な感じがする中学生ですが恐らくこんな中学生にいるのでしょうか？

まあ……世の中いろんな人いるからね、気にしない方向で……

ともかくすごく純粋な恋と彼を思う乙女心を皆さんにお伝えすることが出来ればと思います。

おもしろ要素はないですけど……

またこれには本編があるので連動する形になっているので楽しみにしていただけると嬉しいです。

それでは後編及び本編でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4935y/>

恋に狂いしお菓子の国のアリス-前編-

2011年11月14日03時23分発行